弘前城(鷹岡城, 高岡城) (国重要, 国史跡, 百名城)

(弘前市大字下白銀町) (弘前公園)

弘前城(ひろさきじょう)は、青森県弘前市にあった日本の城である。別名・鷹岡城、高岡城。江戸時代に建造された天守や櫓などが現存し、また城跡は国の史跡に指定されている。江戸時代には津軽氏が居城し弘前藩の藩庁が置かれた。

概要

江戸時代には弘前藩津軽氏4万7千石の居城として、津軽地方の政治経済の中心地となった。城は津軽平野に位置し、城郭は本丸、二の丸、三の丸、四の丸、北の郭、西の郭の6郭から構成された梯郭式平山城である。創建当初の規模は東西612メートル、南北947メートル、総面積385,200平方メートルに及んだ。現在は、堀、石垣、土塁等城郭の全容がほぼ廃城時の原形をとどめ、8棟の建築と現存12天守に数えられる内の天守1棟が現存する。現存建築はいずれも、国の重要文化財に指定されている(詳細は後述の「文化財」の項を参照のこと)。小説家の司馬遼太郎は紀行文集『街道をゆく - 北のまほろば』で、弘前城を「日本七名城の一つ」と紹介している。

歴史・沿革

安土桃山時代

- 1590年(天正18年) - 南部氏に臣従していた大浦為信は、小田原征伐の際に豊臣秀吉より南部氏に先駆けて4万5千石の所領安堵の朱印状を受ける。大浦を津軽と改姓。
- 1594年(文禄3年) - 為信、堀越城(弘前市堀越)を築き大浦城より移る。しかし、軍事に不向きであることを理由に新城の候補を鷹岡(現在の弘前城の地)に選定。
- 1600年(慶長5年) - 為信は関ヶ原の戦いで東軍につき、徳川家康より2千石の加増を受け4万7千石の弘前藩が成立。

江戸時代

- 1603年(慶長8年) - 為信、鷹岡に築城を開始。
- 1604年(慶長9年) - 為信、京都にて客死し、築城は中断する。
- 1609年(慶長14年) - 2代信枚(信牧)、築城を再開。堀越城、大浦城の遺材を転用し急ピッチでの築城を行う。
- 1611年(慶長16年) - 1年1か月で鷹岡城がほぼ完成する。
- 1627年(寛永4年) - 落雷により5層5階の天守を焼失。以後、200年近く天守のない時代が続いた。
- 1628年(寛永5年) - 鷹岡を信枚の帰依する天海大僧正が名付けた「弘前」に改称し、城名も弘前城となる。
- 1810年(文化7年) - 9代藩主津軽寧親、三層櫓を新築することを幕府に願い出て、本丸に現在見られる3層3階の御三階櫓(天守)が建てられた。

明治時代

- 1871年(明治4年) - 東北鎮台の分営が置かれた。
- 1873年(明治6年) - 東北鎮台の分営を廃止。廃城令発布により廃城処分とされ、この後、本丸御殿や武芸所等が取り壊される。
- 1894年(明治27年) - 旧藩主津軽氏が城跡を市民公園として一般開放するため、城地の貸与を願い出て許可される。
- 1895年(明治28年) - 弘前公園として市民に一般開放される。

- 1898年（明治31年） - 三の丸が陸軍兵器支廠（のち第8師団兵器部）用地となる。
- 1903年（明治36年） - これ以降桜が植えられ、桜の名所となる。
- 1906年（明治39年） - 北の郭の「子の櫓」と西の郭の「未申櫓」の櫓2棟が焼失。
- 1908年（明治41年） - 皇太子（後の大正天皇）が、公園を「鷹揚園」と命名する。
- 1909年（明治42年） - 1906年の藩祖為信公三百年祭の記念事業として、高さ約4メートルの津軽為信の銅像が本丸に建立された。

遺構

天守（初代）

最初の天守は、弘前藩2代藩主の津軽信枚により1609年（慶長14年）頃に本丸南西隅に建てられた5重の建物である。内部6階と推定される建築は東北地方では若松城天守に次ぐものであった。しかし1627年（寛永4年）9月の落雷で出火し、天守内部に収納されていた火薬に引火して（4重目に吊るされていた釣鐘が落下して下層に収納してあった火薬に引火したとも）大爆発を起こして本丸御殿や諸櫓とともに焼失した。天守は再建されることなく、今でも天守台を支えていた石垣は本丸南西隅に聳えている。

なおこの天守火災は当時、藩主・信枚の伯母（初代津軽為信の正室・阿保良の姉）の祟りだと信じられていた。伯母は為信のために、横内城城主で南部氏一族の夫・堤弾正左衛門から離縁され失意の内に病没しており、城はそれから30年ほど経ってから完成しているのだが時折、伯母の怨霊が城内に現れていたという。

天守（御三階櫓）

本丸唯一の現存建築である天守は層塔型3重3階の建物である。現在は独立式であるが、往時は北側に多聞櫓を付属させた複合式であった。この多聞櫓は明治29年（1896年）ごろまでに破却されている。天守の高さは約14.4メートルあり、現存する三重天守の中で最も低い。

1627年（寛永4年）に焼失した5重天守の代用として、またロシア船の津軽海峡往来などの事態により幕府の許しを得て、本丸南東隅の辰巳櫓の改修を名目として建てられた。1810年（文化7年）着工、1811年（文化8年）に竣工した。往時は幕府への配慮から天守とは見なさず、櫓（御三階櫓）として扱われていたが、「事実上の天守」としての役割を持ち現在は書籍などの多くで天守として扱われている。昭和24年（1949年）に松前城天守が焼失したため、現在最も北に位置する現存天守でもある。

外壁は白漆喰塗籠で、窓と狭間の上下に長押形を施し、また屋根瓦には寒冷地のため銅瓦を葺いている。外側に面する東面と南面は1層目と2層目に大きな切妻出窓を設け、窓には狭間窓を用いるなど小さな建物を華美で大きく見せる視覚効果が施される。一方で、内側である西面と北面には破風を全く付けずに連子窓を単調に並べただけである。いわゆる「二方正面」である。内部も通常为天守建築では最高級の木材や技術が用いられるが、弘前城の場合は普通の櫓と同等の木材が用いられ、構造的にも簡素であり、床も全て敷居を設けず畳を敷くことが想定されていないなど、当初から倉庫として利用されることを見込んだ構造となっている。

櫓・門ほか

二の丸の現存櫓は3層の辰巳櫓・丑寅櫓・未申櫓の3棟である。門は、三の丸追手門・三の丸東門・二の丸南門・二の丸東門・北の郭亀甲門の5棟がそれぞれ築城時の姿で現存し、以上は国の重要文化財に指定されている。このほかに、二の丸東門与力番所が移築復元されている。

前述の通り現在は5棟の城門が残されているが、築城当初は10棟の城門があった。この内のいくつかの門は、工期の短縮などのため、周辺の城郭より移築されている。具体例としては北の郭北門（通称亀甲門）と三の丸北内門（通称賀田門）がそれにあたり、それぞれ大光寺城および大浦城から移築されている。ちなみに、弘前城の門を参考に時代劇のロケ地に利用されるワープステーション江戸（茨城県つくばみらい市）に「江戸城大手門」が造られている。